



研究論文 (Articles)

交際中のパートナーからの応答性を実感し始めるプロセス： 親密さが高まらないケースを通して¹⁾

谷 千 聖^{*1}・原 田 梓^{*1}・三田村 仰^{*2}

(立命館大学大学院 人間科学研究科^{*1}, 立命館大学 総合心理学部^{*2})

Perceiving responsiveness from a dating partner in a case
where intimacy does not increase.

TANI Chisato^{*1}, HARADA Azusa^{*1} and MITAMURA Takashi^{*2}

(Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

This study employed Trajectory Equifinality Modeling to analyze the experiences of an individual who perceives a lack of intimacy with a dating partner but comes to relate to them, based on an interview with an adolescent woman who felt that her intimacy with her current dating partner was not increasing. First, she discussed how she initially held a favorable impression of her partner's consideration, which involved avoiding hurting others. However, she also reported feeling a lack of fulfillment due to a lack of psychological connection and described their relationship as an asymmetrical one in which her partner shared their concerns, and she provided support. In the second period, her partner did not support her when her family problems worsened, causing her to feel that they were incompatible. In this period, although the couple remained psychologically distant, their relationship was maintained. In the third period, she began to feel happy that her partner cared for, valued, and supported her. In the discussion, we apply the concept of responsiveness to examine the process by which her experiences developed and discuss the possible impact of her depression on her relationship.

本研究の目的は、交際中のパートナーとの親密さが高まっていないと感じている個人の視点から見た、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを記述することであった。現在交際中のパートナーとの間で親密さが高まっていないと感じている青年1名(Aさん)にインタビューを実施し、パートナーにまつわる体験プロセスについて、複線経路・等至性モデリング(TEM)により分析を行った。その結果、Aさんにおいては、第1期では、パートナーの他者を傷つけない態度に好感を抱きつつも、心理的なつながりが希薄な関係に物足りなさも感じていたことが語られた。また、パートナーが悩みを話し、Aさんがそれを支えるという非対称な関係性が構築されたことも語られた。第2期では、家族関係の悩みが増大したときにパートナーからのサポートが得られず、パートナーとの相性の悪さを感じた体験が語られた。この期では、パートナーとの心理的距離は十分に近づいていないものの、カップル関係は維持されていた。第3期では、パートナーが自分を心配してくれたことに嬉しさを感じ、パートナーから大切にされていると実感し始めたことが語られた。また、パートナーが自分を支えてくれるようになったとも感じ始めたことが語られた。考察では、応答性という概念を軸にして、当該の青年から語られた体験プロセスを検討した。また、Aさんがうつに罹患していたことがカップル関係に及ぼしたであろう影響についても議論した。

Key Words : Couple, Intimacy, Perceived Partner Responsiveness, Trajectory Equifinality Modeling, Qualitative Study

キーワード：カップル、親密さ、応答性知覚、複線経路・等至性モデリング、質的研究

1) 本研究は、第一著者が立命館大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文の一部を加筆、修正したものである。

1. 問題と目的

1. カップル関係における親密さ

カップル関係における親密さは、ウェルビーイングに大きな影響を与える。先行研究では、カップルにおける親密さが高いほど、抑うつ気分や不安が低下し、生活満足度が上昇することが報告されている (Prager & Buhrmester, 1998)。また、親密なパートナーの手を握っていると、痛みに関連する神経系の反応が抑制されるという報告もあり (Coan, Schaefer, & Davidson, 2006)。パートナーとの親密な絆はその個人を苦痛やストレスから保護する役割も果たすと考えられる。反対に、パートナー間での親密さの欠如は、心身に悪影響を及ぼす。たとえば、パートナーとの関係の不和が、不安障害や気分障害、物質依存障害などの精神疾患と関連することが示されている (Whisman, 2007)。また、子どもを持つカップルにおいては、両親の不仲が子どもにさまざまな悪影響を及ぼすことも知られている (中村, 2018)。

パートナーに求める親密さの程度には個人差があり、パートナーとの親密さを強く求める個人もあれば、ある程度の自律性を維持したいと望む個人も存在する (Mashek & Sherman, 2004)。パートナーとの間で親密さが不足していると感じている場合、パートナーに対してより多くの親密さを希求し、その結果としてパートナーに対する支配的な行為が生じてしまう可能性が考えられる (金政・古村・浅野・荒井, 2021)。反対に、親密さが過剰であると感じている場合には、パートナーから支配されることへの脅威などが生じる可能性が示唆されている (Mashek & Sherman, 2004)。こういった点を踏まえると、カップル内においては、お互いにとって心地よい親密さの距離を理解し、歩み寄りながら関わり方を調整していくことが重要と考えられる。

2. パートナーとの間で親密さが高まるまでの体験プロセス

パートナーに対する親密さは、パートナーとの関わりを通じて高まっていく。しかし、カップルが親密さを高めていく過程において当事者たちはどのような体験をしているのか、その個別具体的なプロセ

スはこれまで十分に検討されてこなかった。そこで谷・原田・三田村 (2023) は、現在交際中のパートナーとの間で親密さが高まっていると感じている青年6名にインタビューを実施し、当該の青年の視点から見た、パートナーとの間で親密さが高まるまでの体験プロセスを質的に記述した。その結果、パートナーとの間で親密さが高まるまでには、研究協力者である青年がパートナーに悩みを相談したり、パートナーに自身のコンプレックスを曝け出すことなどを通じて自身の弱さをパートナーへと開示し、その弱さをパートナーから受け止めてもらえたという体験が繰り返し生起していたことが語られた。一方で、研究協力者の多くがパートナーに気持ちを受け止めてもらえないという葛藤も体験しており、様々な方法を通じてそうした葛藤を乗り越えていたプロセスも見出された。

3. カップルの親密さが高まらないとき

谷他 (2023) では、パートナーとの親密さが“高まっている”青年に焦点を当て、親密さが高まるまでの体験プロセスを記述した。一方、ある程度の交際期間を経ても、パートナーとの親密さが“高まっていない”と感じている個人も一定数存在していると考えられる。先行研究によれば、大学生は、交際中のパートナーとの間で「関係継続に対する不安感」「相手の過干渉」など様々な葛藤状況を経験しており (相羽, 2017)、カップル関係は友人関係と比較して、相手に対する攻撃・拒否的な感情が生じやすいことが報告されている (立脇, 2007)。すなわち、カップル関係は他の関係性と比べて相手に対する期待が大きく、密接に関わり合うことが多いがゆえに葛藤が生じやすく、親密さを高めることが困難であると想定される。また、上述したように、パートナーに求める親密さの程度は各個人によって異なるため、パートナーとの間で親密さを高めることを控え、一定の距離を維持しているといったケースも想定される。

ある個人が、交際中のパートナーとの間で親密さが高まっていない状態にあるとき、そういった状態に至るまでの体験プロセスについては十分に検討されていない。想定されるプロセスとして、たとえば、パートナーとの親密さが高まっていないと感じてい

る個人は、パートナーから傷つけられるなどの葛藤を多く体験してきた可能性が考えられる。あるいは、パートナーと親密になりすぎないように、あえてパートナーとの積極的な関わりを控えてきたプロセスなども考えられる。

ある個人が「パートナーとの親密さは高まっているが、交際は継続する」という状態に至るまでのプロセスを記述することは、臨床的な意義を有する。カップルセラピーなどの支援を求めて来所するカップルの多くが、親密さが十分に高まっていなかったり、各パートナーが感じている親密さの程度が異なり、二人の間に齟齬が生じている状態であると想定される。したがって、親密さが高まらないときの体験プロセスを記述することにより、カップル支援に携わる支援者が、支援場面で出会うカップルに対する理解を深めるうえで有用な情報が得られると考えられる。

4. 本研究の目的

本研究の目的は、現在交際中のパートナーとの間で親密さが高まっていないと感じている個人にインタビューを実施し、その個人の視点からみた、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを記述することである。

なお、親密さとは、極めて様々な定義が存在する概念である (Perlman & Fehr, 1987; Prager, 1995)。本研究では、親密な関係を「普段は他者に見せないような自分の弱い部分を安心して見せられる関係」と定義した谷他 (2023) の研究を参考に、親密さを、パートナーに安心して弱さを見せられる感覚と定義した。ここでの弱さ (Vulnerability) とは、その人が持つ情緒的な傷つきやすさや、その人が弱っている状態に置かれていることを意味する (Collins, Guichard, Ford, & Feeney, 2004)。パートナーに安心して弱さを見せられると感じられることは、親密さに関する理論およびカップルセラピーにおいて共通して重要視されている要素である (e.g., Cordova & Scott, 2001, Cordova, 2014, Kanter, Kuczynski, Manbeck, Corey, & Wallace, 2020)。

II. 方法

本研究では、谷他 (2023) における研究手続きにもとづき研究を実施した。

1. TEM (複線径路・等至性モデリング) とは

本研究では、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを捉えるための手法として、TEM (Trajectory Equifinality Modeling: 複線径路・等至性モデリング) を用いた。TEM とは、時間を捨象せず、プロセスとして人間の発達や人生径路を捉える研究方法である (安田・サトウ・荒川, 2012)。TEM における重要概念として、等至点 (Equifinality Point: EFP) が挙げられる。EFP とは、個々人が多様な経験を積み重ねていたとしても、等しく到達する地点のことであり (安田, 2005)、TEM ではこの EFP に至るまでの径路について、各種ツールを用いて記述する。TEM で用いられるツールとして、径路が分岐するポイントである分岐点 (Bifurcation Point: BFP)、ほとんどの人が経験するポイントである必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)、EFP へと近づけるように働く力を意味する社会的ガイド (Social Guidance: SG)、EFP から遠ざけるように働く力を意味する社会的方向づけ (Social Direction: SD) が挙げられる。なお、分析にあたっては、等至点とは逆の現象である両極化した等至点 (Polarized EFP: P-EFP) も併せて設定する (荒川・安田・サトウ, 2012)。

TEM では、インタビュー対象者を何人にするべきかという問いに対して、「1・4・9 の法則」が提案されており、インタビュー対象者が 1 名の場合は個人の経験の深みを探ることができ、4 ± 1 名の場合は経験の多様性を描くことができ、9 ± 2 名の場合は経路の類型を把握することができるとされる (荒川・安田・サトウ, 2012)。本研究では、パートナーとの親密さが高まっていないと感じている個人の経験を詳細かつ具体的に探究することを目的として、1 名にインタビューを実施した。

2. データの収集

(1) 研究協力者 本研究では、研究協力者募集にあ

たつての条件として、以下3点を定めた。第一に、本研究では、交際中のパートナーとの間で親密さが高まっていない、すなわち、パートナーとの間で自分の弱い部分を安心して見せられる関係を築けていないと感じている個人を対象とした。第二に、本研究では、谷他（2023）と同様、青年を対象に調査を実施した。その理由は、先行研究では、多くの青年がパートナーとの関係において悩みを抱えていることが報告されており（相羽, 2017）、本研究を通じて、青年が親密な関係を築く際の困難とその解決策に関して示唆を得ることができれば、意義が大きいと考えられたからである。なお、本研究では原田（2012）を参考に、青年を「18歳～25歳の大学生、大学院生」と定義した。第三に、本研究では、「現在交際中のパートナーとの交際期間が1年以上」の者を対象とした。その理由は、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを十分に捉えるためには、ある程度の交際期間を経ている必要があると考えられたからである。募集に際しては、異性カップルか同性カップルかは問わなかった。ソーシャル・ネットワーク・サービス（以下、SNS）を通じて、上記の条件に合致する研究協力者を募集したところ、Aさんから調査協力の同意が得られた。なお、Aさんには、調査結果が「親密さが高まっていないケース」として取り扱われることについて同意を得ていた。

Aさんは23歳の女性であり、研究実施時には大学院に在籍していた。交際中のパートナーとはSNSを通じて知り合い、研究実施時点における交際期間は1年9か月であった。Aさんのパートナーは22歳男性であり、研究実施時には大学院に在籍していた。Aさんとパートナーは同じ大学（B大学）の大学院に在籍していたが、専攻は異なっていた。なお、インタビューを行うなかで、Aさんにはうつ病への罹患歴があることが明らかになった。

(2) データの収集方法 2022年2月から3月にかけて、Aさんを対象に、半構造化インタビューを計2回実施した。インタビューはビデオ会議サービスZoomを用いてオンラインにて実施し、インタビュー時間は1回あたり70～100分であった。インタビュー内容はAさんからの承諾を得て録画および録音を行った。

1回目のインタビューでは、はじめに、パートナーに対する親密さの変化の程度に関して、時間軸上の曲線（ライフライン）で表現するように求めた。そして、ライフラインの変化に着目しながらインタビューを実施した。インタビューガイドの内容はTable1の通りである。1回目のインタビュー終了後、Aさんから語られた内容を踏まえてTEM図を作成した。2回目のインタビューでは、最初に、作成したTEM図を提示しながら、TEM図の説明を行った。

Table 1 インタビューガイド

Q1	出会った当初、パートナーに対する印象はどのようなものでしたか？
Q2	その後、パートナーとの関係性はどのように変化していききましたか？
Q3	交際前と交際後で、パートナーに対する印象に変化はありましたか？
Q4	ライフラインが上昇・下降する起点においてどんな出来事があったか教えてください。
Q5	（ライフラインの区間を指定して）この地点で、パートナーに弱さを見せられる感覚はどのように変化しましたか教えてください。
Q6	パートナーに対して、“この人なら、自分の弱い部分を安心してみせられる”と感じたきっかけになった出来事がありますか？
Q7	パートナーに対して、自分の弱い部分をみせることに対するためらいや不安が生じた出来事がありますか？
Q8	パートナーに対して安心して弱さをみせられる感覚が変化するプロセスにおいて、パートナーとの関わり以外で大きな影響を及ぼした出来事がありますか？
Q9	もし、今現在、パートナーに対して安心して弱さを見せられる感覚が持っていたとしたら、どうなっていたと想像されますか？

※ 本インタビューガイドの内容は、Q9を除き、谷他（2023）と同様である。

その後、Aさんから修正や補足箇所等についてのコメントをもらい、加えて、1回目のインタビューを踏まえて研究実施者がさらに知りたいと感じたポイントについて、追加で質問を行った。

1. データの分析

Aさんから得られたインタビューデータについて、荒川・安田・サトウ（2012）を参考に分析を実施した。主な分析は第1著者が実施した。適宜、第2、第3著者のそれぞれから意見を得て、分析結果の妥当性に関して検討を重ねた。

データ分析の手順は以下の通りである。1回目のインタビュー終了後、インタビュー内容の逐語録を起こし、文字データを意味のまとまりで分節化してラベルを設定した。次に、ラベルをAさんが経験した時系列に沿って並べ、ラベルとラベルを線で結び、EFPに至るまでの経路を図式化した。続いて、SGやSD、P-EFPなどのTEMの各種ツールを追記し、暫定的なTEM図を作成した。作成したTEM図を2回目のインタビューで提示し、そこで聞き取った内容を踏まえてTEM図の修正を行った。以上の手順を経て、最終的なAさんのTEM図を完成させた。本研究において使用したTEMの概念ツールと本研究における意味づけはTable 2の通りである。

各概念ツールは、以下のような経緯を経て設定した。まず、Aさんによる語りデータを繰り返し精読したところ、Aさんは時間経過とともに、パートナーから大切にされていることを実感し始めており、少しずつパートナーとの心理的距離が近づいているといったプロセスが見出された。一方、Aさんは今もなおパートナーとの相性の悪さを感じており、複雑な気持ちを抱えながら、パートナーとの関係を構築し続けている状態に至っていることが伺えた。よって、「パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感しつつ、相性の悪さも感じながら、関係性を構築し続ける」をEFPに位置づけた。あわせて、「パートナーから大切にされていると感じられないまま、気持ちのつながりを求めることを諦め、割り切った関係を続ける」をP-EFPに位置づけた。

続いて、EFPへと近づけるように働いていた力を検討した。その結果、「誠実でまめなパートナーの

態度（SG2）」「無神経な発言をせず、人を傷つけないパートナーの態度（SG3）」といったパートナーの態度は、プロセス全体を通して、Aさんとパートナーとの関係性の破綻を防ぎ、関係維持へと向かわせる力であったと伺えたため、SGとして設定した。続いて、「ストレスの増大（SG4）」「弱さを見せても大丈夫な人が確認したいという思い（SG5）」「周囲に知人がいない一人暮らしの孤立した環境（SG1）」といったAさんおよび環境の要因についても、Aさんがパートナーとの関わりを求める方向へと促進する力を持っていたと考えられたため、SGとして設定した。反対に、「パートナーの感情表現の少なさ（SD1）」「パートナーと親密になりすぎないほうがよいという価値観（SD2）」「無意識的に長女的役割を担ってしまう傾向（SD3）」「会う頻度・スキンシップの少なさ（SD4）」という4つの要因はいずれも、Aさんとパートナーとの心理的距離を遠ざける働きをしていたと推測されたため、SDとして設定した。

BFPは、Aという方向にいくかBという方向にいくかという逡巡のある状態を意味する（荒川他、2012）。こういった定義を踏まえて本研究では、第一に、「家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る」をBFP1として設定した。その理由は、ここでのAさんは、パートナーに悩みを打ち明けるか否かをという逡巡が生じている状態を体験していたと考えられたためである。続いて、「パートナーとの心理的な距離は十分に近づかないまま、カップルとしての関係は維持される」をBFP2として設定した。その理由は、この地点においては、その後のAさんとパートナーとの心理的な距離が近づくか否かという、複線性が生じていたことが伺えたためである。併せて、カップル関係を構築するうえでほとんどの人が経験するであろうポイントとして、「出会い（OPP1）」および「交際が始まる（OPP2）」をOPPとして設定した。

2. 倫理的配慮

本研究は、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会により承認を受けて実施された（審査番号：衣笠-人-2021-43）。Aさんには、本イン

Table 2 AさんのTEMで用いた概念ツールと本研究における意味づけ

概念ツール	本研究における意味づけ
等至点 (Equifinality Point : EFP)	「パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感しつつ、相性の悪さも感じながら、関係性を構築し続ける」
両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point : P-EFP)	「パートナーから大切にされていると感じられないまま、気持ちのつながりを求めることを諦め、割り切った関係を続ける」
必須通過点 (Obligatory Passage Point : OPP)	「出会い」「交際が始まる」
分岐点 (Bifurcation Point : BFP)	「家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る」 「パートナーとの心理的な距離は十分に近づかないまま、カップルとしての関係は維持される」
社会的助勢 (Social Guidance : SG)	「ストレスの増大」「弱さを見せても大丈夫な人が確認したいという思い」「周囲に知人がいない一人暮らしの孤立した環境」「誠実でまめなパートナーの態度」「無神経な発言をせず、人を傷つけないパートナーの態度」
社会的方向づけ (Social Direction : SD)	「会う頻度・スキップの少なさ」「無意識的に長女的役割を担ってしまう傾向」「パートナーと親密になりすぎないほうがよいという価値観」「パートナーの感情表現の少なさ」

タビューの内容や、インタビューへの参加は強制ではないこと、データの取り扱い等についてWebフォーム上および口頭で説明し、書面で同意を得た。

III. 結果

Aさんへのインタビュー結果に基づき、Aさんによる、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスに関するTEM図を作成した（Figure 1）。結果を記述するうえで、経験された行為や出来事、心情、EFP、OPP、BFPは〈〉、SG・SDは【】、Aさんの語りは「」の記号を用いて示した。

分析の結果、OPPとして〈出会い〉、〈交際が始まる〉の2点を設定した。BFPとして〈家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る〉、〈パートナーとの心理的な距離は保たれたまま、カップルとしての関係は維持される〉の2点を設定した。EFPとして〈パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感しつつ、相性の悪さも感じながら、関係性を構築し続ける〉、P-EFPとして〈パートナーから大切にされていると感じられないまま、気持ちのつながりを求めること

を諦め、割り切った関係を続ける〉を設定した。OPP・BFP・EFPを基準としてEFPに至るまでの変化のプロセスを3つの過渡期に分けて整理した。第1期を〈出会い〉から〈家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る〉、第2期を〈家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る〉から〈パートナーとの心理的な距離は保たれたまま、カップルとしての関係は維持される〉、第3期を〈パートナーとの心理的な距離は保たれたまま、カップルとしての関係は維持される〉から〈パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感しつつ、相性の悪さも感じながら、関係性を構築し続ける〉とした。以下では、はじめに、各期におけるAさんによって経験された出来事や感情、考えの詳細を記し、Aさんの視点から見た、パートナーに関わりにまつわる体験プロセスを記載する。次に、プロセス全体のSGおよびSDについて説明する。

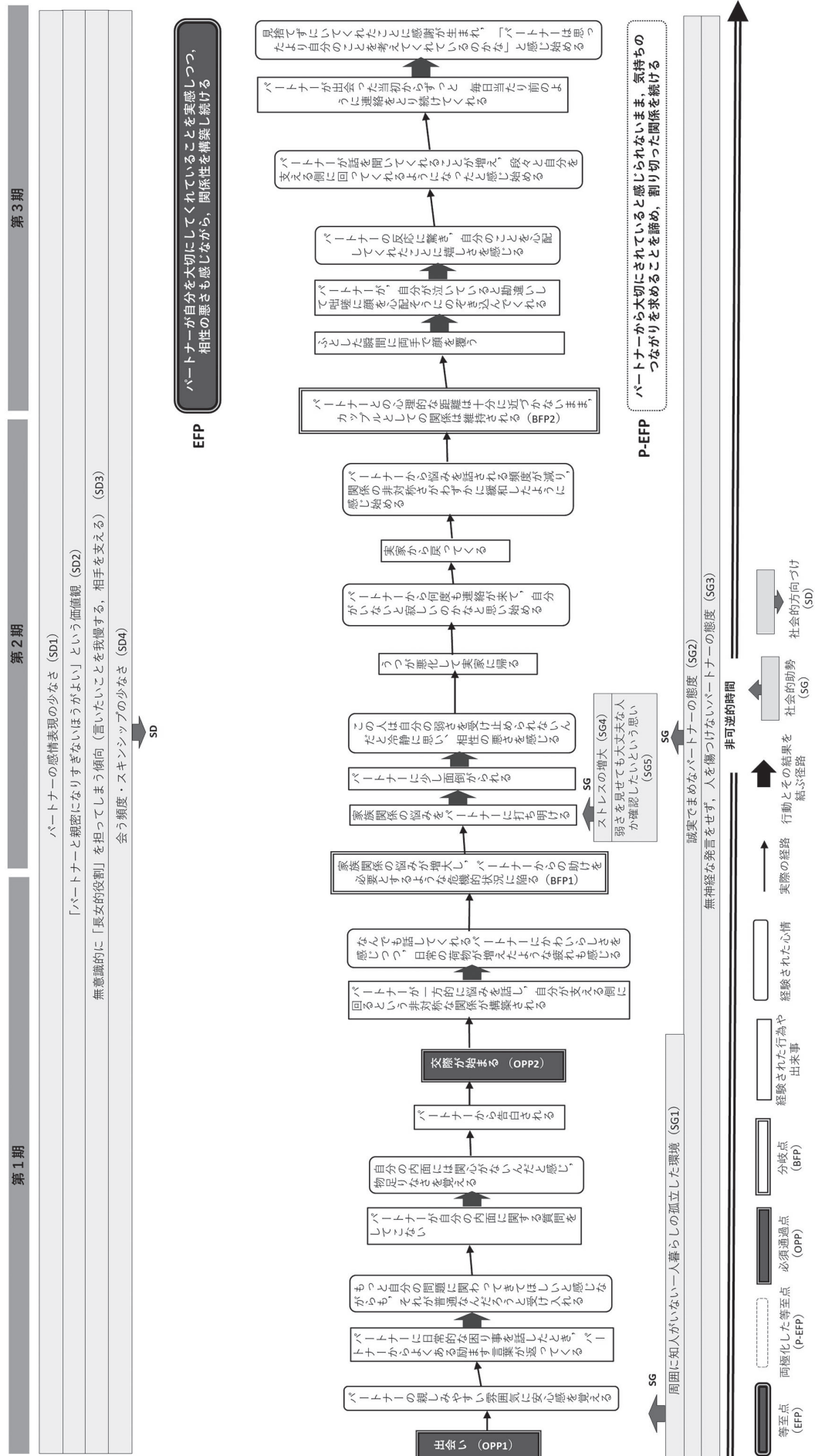


Figure1 Aさんから語られた体験に関するTEM図

第1期：〈出会い〉から〈家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る〉まで

Aさんは、同じ大学の大学院に所属していたことをきっかけに、SNSを通じてパートナーと出会った。パートナーと初めて出会ったときの印象についてAさんは「B大生（Aさんとパートナーが所属する大学）っぽくないなと思いました。説明しないと分からないと思うんですけど、（B大学には）ちょっと怖い感じの人が、パッと見の印象がちょっと暗かったりとか、すごい煽るように喋る人とか、普通にそういう人がゴロゴロいるんですよね。なんですけど、（パートナーは）なんか怖い感じはなく、普通の男子学生だなって思いました。」と語っており、パートナーの〈普通に親しみやすい雰囲気〉がAさんに安心感を与えていたことが伺えた。

Aさんとパートナーは、SNS上でメッセージのやり取りをしたり、実際に会って話していくうちに自然と仲良くなっていった。パートナーとの交流を重ねるなかでAさんは、パートナーについて“嫌なところがない”人だと感じるようになったという。Aさんは「結構、嫌なところがないっていうのが私的に大事だと思っていて。」と語る。パートナーのどのような様子から“嫌なところがない”と感じたかについては、「（パートナーは）怒ったりしないし、あまり軽率な発言をしない。例えば街中でホームレスの人だったりとか、そういうちょっと社会的に弱い立場の人を見かけたりしても、（パートナーは）なんか別に特別な反応を見せたりとかもしないし。」と述べている。こういった語りからは、Aさんにとっては、【無神経な発言をせず、人を傷つけないパートナーの態度】が重要な意味を持っており、パートナーに好感を抱くきっかけとなっていたことが推測される。

Aさんは“嫌なところがない”パートナーに好感を抱きつつも、一方で、パートナーとの関わりに物足りなさを感じてもいたという。Aさんのパートナーは出会った当初からAさんに日常的な出来事をまめに話していたため、Aさんは“自分も日常なことなら喋っても大丈夫だろう”と思い、パートナーに対して大学の講義に関してなどの〈日常的な困り

事

を話すようになった）。それに対して〈パートナーからは「残念だったね」などのよくある励ます言葉が返ってきた〉という。そんなパートナーの反応に対してAさんは、「当時は、なんかもっと言うことのないの？って思っていました。」と述べており、パートナーに〈もっと“自分の問題に関わってきてる感”を出して欲しかった〉と語る。一方で、Aさんは学部で心理学を専攻していたため、学部時代は心に関心を持つ友人に囲まれ、悩みを相談すれば共感的な言葉をかけてもらえる環境のなかで過ごしてきたという。しかし、心理学を学んでいないパートナーであれば、淡白な反応しか得られなくてもしょうがないと思い、〈それが普通なんだろうと受け入れて〉自分を納得させていた側面もあったと語る。また、〈パートナーは、Aさん自身の気持ちや考えなどの内面に関する質問をしてくることが少なく〉、Aさんは〈パートナーは自分の内面には関心を持っていないんだ〉という思いを募らせていった。Aさんはその当時のパートナーとの関係性について「結構、淡泊な関係性だなと思って。もうちょっと、心の距離が近くなりたいなあって思っていました。でもすごく悩んだというよりは、ちょっとつまらないなあって。」と語っており、パートナーに対して強い不満を感じていたわけではないものの、心理的なつながりが薄いように感じられる関係性に〈物足りなさを覚えていた〉ことが伺えた。

Aさんはパートナーに対して物足りなさを感じていたものの、そのことをパートナーに直接伝えることはしなかった。気持ちを伝えなかった一番の理由は、Aさんがもともと【他者にネガティブなことを伝えられずに我慢してしまう傾向】を持っていたためであるという。さらに、「（パートナーと心の）距離が近くなったらなったで、しんどいこともあるんだろうなって思ってたんで。まあ、別にこれでもいいかなっていう気持ちがありました。だから自分からは行動に起こしませんでした。」という語りからわかるように、Aさんの【「パートナーと親密になりすぎないほうがよい」という価値観】も、パートナーに対する積極的な自己開示を抑制していたことが伺えた。

その後Aさんはパートナーと何度か会って話した

あと、パートナーから交際の申し込みを受け、〈交際を開始した〉。交際の申し込みに応じた決め手としては、やはり、パートナーのどんなことがあっても怒らない【人を傷つけない態度】に惹かれたことが大きかったという。加えてパートナーは、知り合ってから毎日欠かさずに、おはようとおやすみのメッセージを送ってくれていたという。そんなパートナーの【誠実でまめな態度】を受けて、Aさんは自分が大切にしてもらえている感覚を抱いていた。さらに、Aさんは大学院進学と同時に一人暮らしを始めたものの、コロナ禍の影響で大学に入れなくなり、当時、【周囲に知り合いがいない孤立した環境】のなかで過ごしていた。そこで、孤独を和らげるために交際相手が欲しいといった気持ちもあったという。

Aさんによると、交際開始後から、徐々に、パートナーから悩みや落ち込んだ出来事を話される頻度が増加していったという。落ち込むパートナーに対してAさんは、自分なりに言葉を選んで励ましていた。そして次第に、〈パートナーが一方的に悩みを話し〉、Aさんが〈パートナーの話を聞き、支える側に回る〉という非対称な関係性が構築されていったことが語られた。Aさんは自らの意志で支える側に回っていたわけではなく、Aさんがパートナーより一歳年上であったことや、Aさんがもともと【人の話を聞き、支える側に回ってしまう傾向】を持っていたことなどが影響し、自然とそうってしまったという。当時の状況についてAさんは、「彼氏には私に対しては、聞いて聞いて、みたいな感じかもしれないです。」と話す。そして、「(他者を支えることは)慣れてたんで、そんなにすごいしんどいと思うことはなかったんですけど。でもやっぱりちょっと日々の荷物が増えた感がありました。」「ちょっと疲れる。もちろん、(パートナーが)かわいくなって思うポジティブな気持ちもあるんですけど。」と語っている。こういった語りから、Aさんはパートナーを支えることを通じて、〈何でも話してくれるパートナーをかわいらしく感じる〉というポジティブな感情と、〈日常の荷物が増えたような疲れ〉というネガティブな感情の双方を体験していたことが伺える。

第2期：〈家族関係の悩みが増大し、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥る〉から〈パートナーとの心理的な距離は保たれたまま、カップルとしての関係は維持される〉まで

パートナーとの関係性を築いていくなかで、〈Aさんが有する家族関係にまつわる悩みが増大し、Aさんは、パートナーからの助けを必要とするような危機的状況に陥ることとなった〉。【ストレスが増大】して耐えられなくなったAさんは、パートナーに電話をかけ、パートナーに対して〈家族関係の悩みを打ち明けることへと踏み切った〉。パートナーに悩みを打ち明けようと思った背景には、家族関係はAさんにとって一番のコンプレックスであり、一緒に過ごす時間が他の誰よりも長いパートナーにコンプレックスを受け止めてもらうことができれば安心できると期待を抱くと同時に、パートナーが自分の家庭環境を知って引いてしまうのではないかと心配も生じ、【パートナーは自分の弱さを見せても大丈夫な人なのか確認したい】という思いが強まったことが影響していたという。

Aさんはパートナーに電話をかけ、泣きながら家族関係の悩みやしんどさを伝えたが、しかし、電話越しのパートナーの声色や話すスピードからは、そんなAさんを〈少し面倒がっているような雰囲気〉が伝わってきたという。Aさんは、そういったパートナーの雰囲気を察知したときの状況について、「だから、話さないほうがいいのかとか、この人とは弱さを見せられるような関係じゃないのかもって思って(話すのを)止めました。」と語る。しかし、Aさんはパートナーの反応に対して、大きなショックを受けたわけではなかったという。当時の心境についてAさんは、「この人とはそういう話をする間柄ではないんだなって結構冷静に思いました。だからショックとかイライラするとかは全然なくて、この人はそういう、私が受け止めてほしいと思っている弱さを受け止められる器の人ではないんだな、それを馬鹿にしているわけではなくて、そういう相性の悪さというか。」と語った。そして〈パートナーとの相性の悪さを感じた〉Aさんは、パートナーに対して無理なことを求めるのはパートナーにとってもしんどいだろうと考え、悩みを相談する候補から

パートナーを外し、悩みは友達や学生相談で相談しようと思い直したという。この出来事に関する A さんの語りからは、パートナーの反応を受けての傷つきや悲しみなどは感じられず、むしろ、パートナーからの助けを期待することを冷静に諦めるようなニュアンスが強く感じられた。

その後、A さんは様々な要因が重なって〈うつが悪化し、休学をして1か月間実家に帰る〉ことになった。パートナーに実家に帰ることを伝えたとき、パートナーからは「今までやっぱりしんどそうだったし、ゆっくり休んでね。」と伝えられた。A さんが実家に帰ってからは、パートナーから何度も「会いたい」と連絡があり、「何もできなくてごめんね。」と謝られたという。さらに、A さんが調子を崩して実家に帰ったことに対するパートナーのショックは極めて大きく、パートナー自身も身体的および精神的に弱ってしまったという。こういったパートナーの一連の振る舞いに対して A さんは、「(自分が実家に帰ったことが) もしかしたら結構彼氏にとって大打撃だったのかなって思います。」「(パートナーは) 寂しいんだなと思って。」と語っており、この時期から〈(パートナーは) 自分がいないと寂しいのかなと思い始めた〉ことが話された。

1か月後実家から戻ってきた A さんは、再びパートナーに会うも、依然としてうつやしんどさは伝えず、平気なふりをして振舞っていた。A さんが実家から戻ってきた後、パートナーから悩みを話される頻度が減ったように感じられ、パートナーが悩みを話し、A さんが支えるといった〈関係のアンバランスさがわずかに緩和したように感じられた〉という。

その後、A さんのうつは次第に悪化し、SNSを通じてパートナーに「死にたい」と言う回数が増加していった。当時の状況について A さんは、パートナーにしんどさをわかってほしいと思っていたわけではなかったが、「(パートナーと) 連絡自体は頻繁に取ってたんで、毎日取ってたんで、しんどすぎて(死にたいという気持ちが) 漏れ出てしまったって感じでしたね。」と語る。死にたいと漏らす A さんに対してパートナーは毎回「死なないで。」と返答していたという。そんなパートナーに対して A さんは“リアクションしにくいことを言ってし

まっでごめんね”と思い、パートナーに対する申し訳なさを募らせていたことが語られた。この時期までの A さんは、依然として、パートナーとの情緒的なつながりは十分には感じられておらず、〈パートナーとの心理的な距離は十分に近づいていなかった〉と推測される。一方で、お互いに別れを切り出すこともなく、〈カップルとしての関係は維持される〉という状態にあったと推測される。

第3期：〈パートナーとの心理的な距離は保たれたまま、カップルとしての関係は維持される〉から〈パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感しつつ、相性の悪さも感じながら、関係性を構築し続ける〉まで

次第に A さんの体調が改善していくなかで、A さんにとって極めて印象的な出来事が起こった。パートナーが A さんの家に遊びにきていたとき、A さんは顔がかゆくなり両手で顔を覆ったという。そんな A さんの様子を見たパートナーは、A さんが泣いていると勘違いして驚き、〈咄嗟に A さんの手をとって顔から離し、心配そうな目で A さんの顔を覗き込んだ〉。そのときの状況について A さんは「(パートナーが) すごい驚いた感じで、この覆ってる手を広げてすごい心配そうな目でこっち見てて、この人は私のことを心配してるんだなと思って。それこそ最初の方は(パートナーは) あんまり人の心に興味になさそうって思ってたけど、そういう心がちゃんとある人なんだなと思って。それは記憶に残ってますね。」と話した。そして、〈パートナーが自分のことを心配してくれて嬉しかった〉と語った。A さんはこの出来事を“すごい印象的だった出来事”と述べており、とっさに A さんの顔を覗き込むパートナーの姿を見たことは、A さんにとって、パートナーが自分を大切に思ってくれていることを実感する契機となったと推察される。

第3期に入ってから、こういったエピソードと同様の、覚えていられないほどに些細だけれども、パートナーからの思いやりを感じられる出来事が積み重なり始めたという。第3期に入ってから、〈パートナーが割となんでも話を聞いてくれるようになり〉、A さんは〈パートナーも段々と自分のことを支える側に回ってくれるようになったことを実感し

始めた)。さらに A さんは、うつで辛い状況になったり、死にたい気持ちを漏らしてしまったりしたときも、どんなときでも変わらずに〈当たり前のように毎日連絡をくれているパートナーに対して〉、〈自分がどんな状態になっても見捨てずにいてくれたことへの感謝が生まれ、「思ったよりもパートナーは自分のことを考えてくれているのかな」と感じ始めた〉という。A さんは、第 3 期を経てのパートナーとの関係について、「パートナーに弱さを見せられるというよりかは、やっぱりこの人（パートナー）には弱さを見せられないなって思うことがなくなったかもしれないです。」と語った。こういった語りからは、A さんは少しずつ、パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感し始めており、パートナーとの心理的な距離が近づき始めているような様子が伺える。

第 3 期に入ってから A さんとパートナーとの関係は少しずつ変容している一方で、関係性のアンバランスさは依然として残っているという。A さんは「ちょっとずつ（関係性が）変化したりとかあると思うんですけど、ベースとして私の方がお姉ちゃん的というか。支える側みたいな感じの力を持っていますと思うので、それはこの先もずっと続いていくのかなと思います。」と語っており、「もっと私に合ってる人がいたらそっちのほうがいいんじゃないかなっていう感覚はあります。」「今の彼氏と結婚は考えられないかなって思います。」と述べている。このことから、A さんは今もなお、パートナーとの相性の悪さや、パートナーを支える側に回らなければいけない疲れを感じていいると考えられる。こういった今の A さんの状況は、〈パートナーが自分を大切にしてくれていることを実感しつつ、相性の悪さも感じながら、関係性を構築し続ける〉という EFP に到達していると考えられた。

プロセス全体の SG および SD

A さんが EFP に至るまでのプロセス全体を通して、【連絡頻度の高さ】と【無神経な発言をせず、人を傷つけないパートナーの態度】、【誠実でまめなパートナーの態度】の 2 つが SG として働いていた。

上述したように、A さんのパートナーは、社会的

に弱い立場の人を見かけても特別な反応を見せたりせず、A さんの休学に対しても何も言わないなど、一貫して【無神経な発言をしない態度】を見せていた。こういった態度を受けて A さんは、「出会ったところから（現在まで）ずっと（パートナーとの間で）嫌なことがあんまりなかったかな。」と語っており、人を傷つけないパートナーの態度は、A さんにとっての親密さを促進する働きを持っていたと推測された。

また、【誠実でまめなパートナーの態度】も、A さんにとっての親密さを促進する働きを有していたと考えられた。誠実でまめなパートナーの態度について A さんは、「最初からずっと向こう（パートナー）が連絡頻度いきなり落としたりとか、私のこと不安にさせたりとかも全然なかったんで。誠実な人やなと思って。」「（パートナーからの）返信が遅かったりとかすると、理由を言ってくれたりとか、私は全然そんな気にしないんですけど。今日こういうことしてたとか言ってくれたりとか。女の子とも遊んだりもしないし。前にお付き合いした人の話とかも全然してこないし。」と語っている。そしてそういったパートナーの振る舞いは、A さんにとっての親密さを引き出していたと考えられた。

プロセス全体を通して、【会う頻度・スキンシップの少なさ】【無意識的に「長女的役割」を担ってしまう傾向】【「パートナーと親密になりすぎないほうがよい」という価値観】【パートナーの感情的なリアクションの少なさ】の 4 つが SD として働いていた。【会う頻度・スキンシップの少なさ】については、A さんとパートナーの会う頻度は 2 週に 1 回～月 1 回と少なく、お互いの内面を伝えたり知ったりする機会自体が少ないことが話された。また、パートナーと性交渉をしていないことで身体的な距離が近くなりすぎず、それに伴ってパートナーとの心の距離も保たれているように感じていることも語られた。

【無意識的に「長女的役割」を担ってしまう傾向】とは、A さんが有する、他者にネガティブなことを伝えられずに我慢してしまう傾向や、人の話を聞き、支える側に回ってしまう傾向のことを意味する。A さんは実際に長女であり、基本的にほとんどの対人

関係において、自分の言いたいことは我慢して、相手の世話を焼いたり支えたりするという「長女的役割」を任されてしまうことが多かったという。さらに A さんのパートナーは末っ子であり、かつ A さんより年下であったという要因なども重なり、A さんはパートナーとの間でも「長女的役割」を引き受けてしまうこととなった。それゆえに、A さん自身の弱さや悩みを進んでパートナーへ伝えようとは思えなかったことが語られた。

A さんは【「パートナーと親密になりすぎないほうがよい」という価値観】を持っていた。A さんは、パートナーと親密になりすぎてしまうとパートナーの言動の全てが気になり、他のことに手がつけられなくなってしまっただろうと考えていた。さらに、A さんは「ひとりの人間に自分が求めることの全てを担ってもらうのは不可能である」と考えており、恋愛関係とはあくまでも家族や友人、先輩後輩関係などと同等の関係性のひとつであると捉えていた。こういった価値観を持っていた A さんにとって、心の距離が近くなりすぎていない現在のパートナーとの関係性はちょうどよく、あえて親密にならないようにしようとパートナーとの関わり方を調節していたことが語られた。

【パートナーの感情表現の少なさ】は、プロセス全体を通じて親密さを低める効果を持っていたと考えられた。A さんのパートナーは感情を表現することが少なく、いつも淡々と話すような人であった。A さんはパートナーの感情表現の少なさを物足りなく思っており、“自分だけが感情的になったらパートナーに重いと思われる”と考えていたため、パートナーに対して自身の感情を表出することを抑制していたという。加えて、何かを話したとしてもパートナーからの情緒的なリアクションが薄いため、話しくいと感じていたことが語られた。

IV. 考察

本研究の目的は、交際中のパートナーとの間で親密さが高まっていないと感じている個人にインタビューを実施し、その個人の視点からみた、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを記述する

ことであった。以下では、はじめに、A さんの語りから得られた体験プロセスについて、応答性という概念を用いて考察する。続いて、A さんによるうつ病への罹患がカップル関係に及ぼした影響について考察する。最後に、本研究の課題と今後の展望を述べる。

1. パートナーからの応答性を巡る体験の変容

第 1 期および第 2 期において、A さんからは、家族関係の悩みを話したときにパートナーから面倒そうな反応をされたり、パートナーから一方的に悩みを話されるといったエピソードが語られていた。すなわち、第 2 期までは、A さんはパートナーから大切にされていることを十分に実感できていなかった状態にあったことが推測される。しかし、第 3 期に入った頃から、A さんにとっての「パートナーが思ったより自分のことを大切にしてくれている」という実感が増してきたことが語られていた。

パートナーが自分のことを大切にしてくれていると実感できることは、パートナーからの応答性知覚 (Perceived Partner Responsiveness; PPR) として概念化されている (Reis & Shaver, 1988)。先行研究では、応答性知覚の高さはパートナーに対する親密さの高さを予測することが示されており (Laurenceau, Barrett, & Pietromonaco, 1988)、応答性とは、ひとが親密で健康的な関係性を築くうえで核となる要素であると考えられている (Finkel, Simpson, & Eastwick, 2017)。応答性という観点から A さんの語りに基づく体験プロセスを捉えると、A さんは当初、パートナーからの応答性を十分に感じていなかったと推測される。しかし、パートナーとの関係性を構築していくなかで、少しずつ、パートナーからの応答性を実感し始めるように変化していったプロセスを捉えることができる。

A さんによると、パートナーからの応答性を実感し始める転換点となったのは、第 3 期に入り、心配そうに A さんの顔を覗き込むパートナーの姿を見たことであったという。“すごい印象的だった出来事”という A さんの言葉にも表れているように、A さんは、咄嗟に自分の手をとって顔を覗き込むパートナーの振る舞いを見たことにより、パートナーは自

分を想ってくれていることを実感できた可能性が考えられる。こういったパートナーの咄嗟の振る舞いは、頭で考えた意図的な行動ではなく、無意識的に生じた反射的な行動であったと推測される。そして、そのように反射的に生じた行動であったからこそ、Aさんは「パートナーは建前ではなく本心から自分を心配してくれている」と感じられた可能性が考えられる。

2. 本ケースにおけるうつ（精神疾患）の影響

Aさんとパートナーの関係性の変化を捉えるうえでは、Aさんがうつ病に罹患していたことの影響を考慮する必要がある。Aさんは「(第3期頃から、パートナーとの関係が徐々に良い方向へと変化した)一番の理由は私の状態にあるのかなと思っていて。」と述べている。こういった点から、Aさんのうつは、Aさんによるパートナーへの認識の仕方にも影響を及ぼしていたと推測される。そして、うつが改善していくにつれ、パートナーへの認識も肯定的な方向へと変化した可能性が想定される。また、Aさんがうつに罹患していたことは、Aさんのパートナーにも大きな影響を及ぼしたであろう。先行研究では、うつ病患者の配偶者は、自分のせいで相手がうつになってしまったのではないかという後悔や自責感を抱くことが報告されている(原田・澤田・吉野, 2020)。Aさんが「(自分がうつにより実家に帰ったことが)結構彼氏にとって大打撃だったのかなって思います。」と語っていたことを踏まえても、Aさんのパートナーのなかでは、うつに起因するAさんの変化に対する戸惑いや自責感、どのように接したらよいかわからない不安など、極めて様々な葛藤が生じていたと想定される。Aさんのパートナーは、そういった葛藤のなかで、Aさんの助けになるような振る舞い方を必死で模索していた可能性が考えられる。

3. 本研究の課題と今後の展望

最後に、本研究の課題と今後の展望を四点述べる。第一に、本研究では、Aさんの視点からみた、パートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを記述した。しかし、Aさんから語られた出来事について、

パートナー側はどのような体験をしていたかについては検討できていない。よって今後は、カップル双方にインタビューを実施し、パートナーそれぞれの視点からみた関係性の構築プロセスを聞き取ること、二人の体験の共通性や齟齬について検討することが有用と考えられる。これにより、カップルという二者関係の変化についてのより俯瞰的で総合的な理解が可能になると考えられる。

第二に、本研究では、TEMを用いてパートナーとの関わりにまつわる体験プロセスを記述した。TEMを用いたことにより、時間経過に伴うAさんとパートナーとの関係性の変化や、その変化に作用していた力をわかりやすく可視化できたと考えられる。一方、Aさんの語りからは、パートナーへの認識が変化していくプロセスにおいて明確な変わり目が存在していない様相も認められた。こういった点を踏まえると、パートナーへの認識やカップル関係は明確な段階を経て一方向的に変化していくのではなく、むしろ、行きつ戻りつしながら徐々に変容していく性質を持つと考えられる。本研究におけるTEM図では、こういった明確な節目が存在しない変化の様相を詳細に描き出すことが困難であった点が課題として残された。今後、カップル関係における変化をより詳細に捉えるための分析法を模索していくことが必要であると考えられる。

第三に、本研究の研究協力者は1名のみであり、本研究から得られた知見以外のプロセスについては検討できていない。よって今後は、研究協力者の人数を増やし、分析を拡充することで、体験プロセスの多様性を検討していく必要がある。また、本研究は、未婚である異性愛カップルを対象とした。一方、現代社会においては、結婚後のカップル(夫婦)や同性カップル、国際カップルなどの多様なカップルの在り方が想定される。こういったカップル特有の要因は親密さに様々な影響を及ぼすことが想定されるため、将来的な展開として、より多様な属性を持つカップルを対象として親密さにまつわる体験プロセスを検討していくことが必要と考えられる。

第四に、本研究から得られた知見に基づき、カップルを対象とした心理実践を洗練させていくことが望まれる。カップルへ支援を考えるにあたり、Aさ

んから「パートナーと親密になりすぎないほうがよい」という価値観が語られており、Aさんは、心の距離が近すぎないパートナーとの関係がちょうどよいと感じていた点は重要と考えられる。宇都宮（2016）は、どのようなかたちでの関係継続を望むかは各カップルやパートナーによって異なり、状況や相手の反応によっても変動していくものであると指摘している。すなわち支援者は、カップル支援において一律に親密さを高めることを目指すのではなく、各カップルが望む関係の在り方を最大限に尊重し、関係に対する志向性を踏まえて介入を行うことが必要と考えられる。そのうえで、カップル双方が心地よい距離感で関わりあえるよう、働きかけていく必要があると考えられる。

V. 謝辞

本研究のインタビューにご協力いただきましたAさんに、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 相羽 美幸（2017）. 大学生の恋愛における問題状況の構造的枠組みの構築 応用心理学研究, 42 (3), 234-246.
- 荒川 歩・安田 裕子・サトウ タツヤ（2012）. 複線径路・等至性モデルのTEMの描き方の一例 立命館人間科学研究, 25, 95-107.
- Coan, J. A., Schaefer, H. S., & Davidson, R. J. (2006). Lending a hand: Social regulation of the neural response to threat. *Psychological Science*, 17 (12), 1032-1039.
- Collins, N. L., Guichard, A. C., Ford, M. B., & Feeney, B. C. (2004). Working models of attachment: New developments and emerging themes. In W. S. Rholes & J. A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. (pp. 196-239). New York: Guilford Press. (ロールズ, W. S. & シンプソン, J. A. 遠藤 利彦・谷口 弘一・金政 祐司・串崎 真志 (監訳) (2008). 成人のアタッチメントー理論・研究・臨床ー 北大路書房)
- Cordova, J. V. (2014). *The marriage checkup practitioner's guide: Promoting lifelong relationship health*. American Psychological Association.
- Cordova, J. V., & Scott, R. L. (2001). Intimacy: A behavioral interpretation. *The Behavior Analyst*, 24 (1), 75-86.
- Finkel, E. J., Simpson, J. A., & Eastwick, P. W. (2017). The psychology of close relationships: Fourteen core principles. *Annual Review of Psychology*, 68, 383-411.
- 原田 新（2012）. 発達の移行における自己愛と自我同一性との関連の変化 発達心理学研究, 23 (1), 95-104.
- 原田 由香・澤田 いずみ・吉野 淳一（2020）. うつ病患者の配偶者が認識していたうつ病が家族にもたらした影響とその対処 日本精神保健看護学会誌, 29 (2), 40-49.
- 金政 祐司・古村 健太郎・浅野 良輔・荒井 崇史（2021）. 愛着不安は親密な関係内の暴力の先行要因となり得るのか？ー恋愛関係と夫婦関係の縦断調査からー 心理学研究, 92 (3), 157-166.
- Kanter, J. W., Kuczynski, A. M., Manbeck, K. E., Corey, M. D., & Wallace, E. C. (2020). An integrative contextual behavioral model of intimate relations. *Journal of Contextual Behavioral Science*, 18, 75-91.
- Laurenceau, J., Barrett, L. F., & Pietromonaco, P. R. (1998). Intimacy as an interpersonal process: the importance of self-disclosure, partner disclosure, and perceived partner responsiveness in interpersonal exchanges. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74 (5), 1238-1251.
- Mashek, D. J., & Sherman, M. D. (2004). Desiring less closeness with intimate others. In D. J. Mashek & A. Aron (Eds.), *Handbook of closeness and intimacy*. (pp. 343-356). Psychology Press.
- 中村 伸一（2018）. 夫婦不和の子どもへの影響 心身医学, 58 (4), 320-325.
- Perlman, D., & Fehr, B. (1987). The development of intimate relationships. In D. Perlman, S. Duck (Eds.), *Intimate Relationships: Development, dynamics and deterioration* (pp.13-42). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Prager, K. J. (1995). *The psychology of intimacy*. Guilford.
- Prager, K. J., & Buhrmester, D. (1998). Intimacy and Need Fulfillment in Couple Relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15 (4), 435-469.
- Reis, H. T. & Shaver, P. (1988). Intimacy as an interpersonal process. In S. W. Duck (Ed). *Handbook of Personal Relationships: Theory, research and interventions* (pp.367-389). John Wiley & Sons Ltd.
- 谷 千聖・原田 梓・三田村 仰（2023）. 「弱さを見せること」と「それが受け止められること」——親密なパートナーに弱さをさらけ出せるようになるまでの体験プロセス—— 対人援助学研究, 14, 28-43.
- 立脇 洋介（2007）. 異性交際中の感情と相手との関係性 心理学研究, 78 (3), 244-251.
- 宇都宮 博（2016）. 恋愛から婚約、結婚への道のり——夫婦関係の成立に向けて 宇都宮 博・神谷 哲司（編） 夫と妻の生涯発達心理学 福村出版

Whisman, M. A. (2007). Marital distress and DSM-IV psychiatric disorders in a population-based national survey. *Journal of Abnormal Psychology*, 116 (3), 638-643.

安田 裕子 (2005). 不妊という経験を通じた自己の問い直し過程——治療では子どもが授からなかった当事者の選択岐路から 質的心理学研究, 4 (4), 201-226.

安田 裕子・サトウ タツヤ・荒川 歩 (2012). 第1章 TEM 入門編——丁寧に、そして、気楽に（楽に雑にはダメ）. 安田 裕子・サトウ タツヤ（編）TEM でわかる人生の径路——質的研究の新展開 誠信書房

(2024. 3. 31 受稿) (2025. 7. 19 受理)

(ホームページ掲載 2025 年 8 月)